

<研究報告>

## 複言語サポーターにとってのコンピテンシー 複言語・複文化能力との関わりを中心に

徳井厚子 信州大学学術研究院教育学系

キーワード：複言語サポーター， 複言語・複文化能力， 語り， コンピテンシー

### 1. はじめに

現在、国内でも生活者としての外国人が増加し、地域や学校において外国籍住民の支援を行う支援者の存在は必要かつ重要となってきた。ビザや家庭や仕事、地域での生活や医療の相談等生活者として日本で生活するために様々な相談が寄せられており、これらの様々な相談に対応する相談員やサポーターの存在は欠かせられないといえる。なかでも複言語サポーター（外国にルーツを持ち、複数の言語を駆使しながら外国人に支援を行っている者）は、複数の言語を駆使しながら日本語母語話者のサポーターにはなし得ない様々な役割を果たしていると考えられる。

総務省(2006)は、「多文化共生」について「国籍や民族の異なる人々が、互いの文化的違いを認め合い対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」としている。国籍の異なる人々が「地域社会の構成員」のひとりとして生きていくためにも、複言語サポーターの存在は欠かせないといえるだろう。

では、複言語サポーターが外国人に支援を行う際、複言語サポーターにはどのようなコンピテンシーが必要といえるだろうか。徳井(2014)では複言語サポーターが複数の言語をどのように使用しているかについて考察しているが、コンピテンシーにまで踏み込んで論じていない。当研究は、複言語サポーターの語りを分析し、複言語サポーターにとってどのようなコンピテンシーが必要かについて、複言語・複文化能力との関わりから考察を行うものである。

### 2. 複言語・複文化主義と複言語・複文化能力

複言語サポーターは、外国にルーツを持ち、複数の言語を駆使しながら外国人に支援を行っているが、複言語サポーターにとってのコンピテンシーを考える際、複言語・複文化能力とは密接な関係にあると考えられる。

山川(2010)によれば、欧州評議会は「複言語主義」「複文化主義」を「個人」の領域、「多言語主義」「多文化主義」を「社会」の領域と名づけ、複数の言語的・文化的背景をもった「社会」が「多言語社会」であり、「多文化社会」であるとみなしており、複言語主義について「それぞれの言語を個人の体験や生活の必要性に応じて使い分けようとする態度に重きをおく」としている。

欧州評議会(2001)では、複言語・複文化主義について以下のように記されている。

個々人の言語体験はその文化的背景の中で広がる。(略)しかしその際、その言語や文化を完全に切り離し、心の中の別々の部屋にしまっておくわけではない。むしろそこでは新しいコミュニケーション能力が作り上げられるのであるが、その成立にはすべての言語知識と経験が寄与するし、そこでは言語同士が相互の関係を築き、また相互に作用し合っているのである。(p.4)

ここで、「新しいコミュニケーション能力」を「つくりあげる」と述べられているが、これは従来のコミュニケーション能力観とは異なっていることを示唆している。従来は、「コミュニケーション能力」を「すでにあるもの」として捉えがちであったが、「つくりあげていくもの」として捉えている。このように能力を「作り上げていくもの」として構築的に捉えていく捉え方は重要であろう。また、コミュニケーション能力の成立について「すべての言語知識と経験の寄与」「言語同士が相互の関係を築き、相互に作用し合っている」こととの関連性を示している。

また、欧州評議会(2001)では、以下のように様々な状況の中で言語を使い分けることについて以下のように述べられている。

いろいろな状況の中で、同じ一人の人物が特定の相手との対話で効果を上げるために、その能力の中から一定の部分を柔軟に取り出して使うこともする。例えば、対話の当事者たちは会話の途中で言葉を別の言語に変えることもあるし、方言を使い出すこともある。互いに、自己をある言語で表現し、また別の言語を理解することができる能力を利用するのである。(p.4)

欧州評議会(2001)は、複言語・複文化能力について「コミュニケーションの目的に応じて言語を使い分けたり、異文化間の相互行為に参加できる能力。複数の文化の経験や言語の中で様々な程度に変化させることのできる力」としている。これは、「言語の使い分け」に焦点をおいている点、「相互行為に参加できる」という行為に焦点をおいている点に特徴がある。また、「様々な程度に変化させることのできる力」と変化という点に焦点をおいている点も特徴的である。

ここで提示されている複言語・複文化能力は、「言語を使い分ける」「相互行為に参加できる」「様々な程度に変化させる」と記されているが、「文脈性」「動態性」という特徴があるといえるだろう。これらは従来の能力とは異なった点に焦点を置いているといえる。複言語サポーターは、支援の状況や相手の状況など多様な文脈の中で複数の言語を駆使しながら支援を行っており、欧州評議会の定義する複言語・複文化能力とは密接な関係があるといえる。また、「文脈性」「動態性」は重要なキーワードであるといえる。

しかし、これらについて例えば「複数の文化の経験や言語の中で様々な程度に変化させることができる力」とは具体的な場面でどのようにすることが明確に記されていないなど、具体性にやや乏しいといえる。実際の具体的な場面でどのようなコンピテンシーが必要なのか考察していく必要があるといえる。

当研究では、複言語サポーターの語りを分析し、実際にどのようなコンピテンシーが必要か複言語・複文化能力を中心に考察を行うものである。

### 3. 研究概要

調査の概要は次の通りである。調査は、4名の複言語サポーターに半構造化インタビューを行った。インタビューは1対1で日本語で行い、一人1時間～1時間半かけて行った。インタビュー内容は支援の概要、支援のコミュニケーション、仕事に対する思い問題とその解決、悩み、周囲との関係等である。インタビューを行うにあたり、研究成果の公表にあたっては本名を公表せずアルファベットもしくは仮名という形を用いること、本人であることが推測できる情報は記載しないこと、本人の話したくないことを聞かれた場合は話すことを拒否する権利を持つことを条件に事前にインタビューイヤーから許可を得た。インタビューイヤーの詳細は以下の通りである。

表1 インタビューイヤーの詳細

インタビューイヤー	性別	国籍	支援の内容
A	女	ブラジル	外国人生活相談
B	女	ブラジル	外国人生活相談
C	女	中国	外国人生活相談
D	女	フィリピン	外国人生活相談

### 4. 分析結果

インタビューの内容から、複言語サポーターに必要なコンピテンシーを示唆する語りをカテゴリー化したところ、大きく以下の3つに分けられた。

- (1) 状況や文脈に応じて自己の位置づけを変化させたり複数の言語の使用を変化させるコンピテンシー
- (2) 異文化間の調整のコンピテンシー
- (3) ネットワーキングのコンピテンシー

以下ではこのそれぞれについてインタビュー事例を挙げながら考察する。なお、語りの内容については斜体で記す。

#### 4.1 状況や文脈に応じて自己の位置づけを変化させたり複数の言語の使用を変化させるコ

## コンピテンシー

まず、文脈を理解し、文脈に応じて自己の位置づけを変化させたり複数の言語の使用を変化させることについての語りが見られた。

### <相手の文脈の理解についての語り>

まず、相手の文脈を理解することに関する語りが見られた。外国人の生活相談を行っているブラジル人サポーターAは、以下のように語っている。

相談者の受けてきた教育のレベルが相談しにくるときにわかる。例えばメールやフェイスブックなどを読むと、写真も含めてその人の教育レベルが相手に会ったことがなくてもわかる。

Aは、相談の前に相手のメールやフェイスブック等の情報から相手の状況や文脈を理解し、理解した上で相手の相談に応じようとしている。相談の前に、相手の文脈について知ることの重要性についての語りである。

この語りは、相談者の文脈についてあらかじめ理解しようとするコンピテンシーの重要性を示唆している。

### <文脈に応じて複数の言語を使い分けるという語り>

相手の文脈に応じて複数の言語を使い分けるという語りも見られた。ブラジル人のサポーターBは、相手の文脈に応じて複数の言語の使い分けをしていることについて以下のように語っている。

無理して日本で日本語を使うのではなくて、困っているときにはポルトガル語でゆっくり丁寧に説明する。そうすると相手は安心する。

Bは、相手が困っているという状況の際には、日本語ではなく相手の母語を選択し、ゆっくり丁寧に話すと述べている。相手の状況や文脈に応じて言語や話し方を選択しているという。

この語りは、相手の文脈に応じて言語を選択するコンピテンシーの重要性を示唆している。

### <文脈に応じて位置づけを変化させることに関する語り>

自身が複数の「顔」を持っているという語りも見られた。中国人のサポーターCは、以下のように「組織の職員」としての「顔」と「日本にいる中国人」としての「顔」の2つの顔を持っていることを常に意識していると語っている。

自分は、「日本にいる中国人」としての顔と「職員としての顔」の2つを持っている。これにふさわしい行動をしなければならない。

自身がサポーターとしての位置づけと日本に住む中国人としての位置づけを兼ね備えていることについての語りである。そして、Cは「これにふさわしい行動をしなければならない」と述べ、こうした2つの位置づけを意識しつつ、状況や文脈に応じて「ふさわしい行動」をしていくことの必要性について述べている。

この語りは、「サポーター」と「日本に住む外国人」という2つの位置づけを意識しつつ、文脈に応じながら自身の位置づけを変化させていくコンピテンシーの重要性を示唆している。

#### 4.2 異文化間の調整のコンピテンシー

双方の文化の違いに気づいて説明し、異文化間調整を行っているという語りも見られた。中国人サポーターCは、葬儀に際して双方の異なった文化を理解し周囲に説明したと語っている。

日本では亡くなった人を病院から家へいったん連れて帰るが、中国は病院から直接火葬場へ運ぶ。病院のソーシャルワーカーの人に説明して中国のやり方にしてもらった。日本では白い着物を亡くなった人に着せるが、中国では新しい下着、服、コート、靴を着せる。このことを日本の看護婦さんはわからなかったので、説明した。手の組み方は日本のやり方にした。中国では骨を拾わないが、日本のやり方に従って骨を拾った。

葬儀の方法は文化によって異なるが、葬儀の文化差についてはあまりふだんは意識されていない。Cは、「亡くなった人を病院から自宅に運ぶ」という日本での方法と「亡くなった人は自宅には運ばず直接火葬場へ運ぶ」という中国での方法の違いについて、病院のソーシャルワーカーに説明した上で中国の方法を取り入れたという。また、亡くなった人に着せる衣装の違いについても看護師に説明したという。このようにCは日本と中国の文化差について日本人のソーシャルワーカーや看護師に説明し、理解してもらおうという文化の仲介の役割を担っている。その上で、日本と中国のどちらのやり方に従うかについてそれぞれの部分について調整しながら選択している。この場合、すべて日本式か中国式かという選択ではなく、文脈に応じて一部は日本式、一部は中国式という形で選択している。その意味でCは文脈に臨機応変に応じながら、異文化間の調整を行っているといえるだろう。

この語りは、双方の文化差について説明し、異文化間の調整を行うコンピテンシーの重要性を示唆している。

#### 4.3 ネットワーキングのコンピテンシー

また、ネットワーキングのコンピテンシーに関する語りも見られた。野山(2003)は、ネットワーキングについて「地域における、何らかの機関、団体、関連領域の人たちが、ある共通意識のもと偶然にせよ必然にせよ有機的につながっている状態」とし、「そのつながりがより動的に機能しているイメージ」としている。ここでは、野山(2003)が特に「動的」に捉えることに注目し、「ネットワーキング」という用語を用いる。

<ネットワーキングにおける自立の必要性に関する語り>

フィリピン人のサポーターDは、ネットワークが機能していることについて以下のように述べ、自立した上でのネットワーキングの重要性について述べている。

今は声をかけるとすぐにコミュニティができる。自分の責任で、自分で動く。協力し合う。助け合いができています。

Dは、自身の出身であるフィリピン人のコミュニティについて、以前はコミュニティがなかったのが、現在は声をかけるとすぐにコミュニティができるようになったと述べている。そして、このような現在の状況の中で、協力し合う関係のために「自分の責任で、自分で動く」ことが重要であることについて述べている。ネットワーキングにおいてはそれぞれが自分の責任で自立することが重要であるという語りである。

この語りでは、自立した上でネットワーキングを行うコンピテンシーの重要性について示唆している。

<ネットワーキングの仲介の重要性に関する語り>

フィリピン人サポーターのDは、行政と地域との間のネットワーキングの仲介の必要性について以下のように述べている。

(当事者が) 社会に貢献したいなどいろいろあるが、声が届いていない。キーパーソンが自分の地域に連絡してくれる。キーパーソンが現場のいろいろな声を(行政に)届ける。例えば、地域で起きている問題や希望、何ができるかといったことなど。

Dは、当事者が社会に貢献したいという気持ちが行政に直接声が届かないが、地域のキーパーソン(複言語サポーター)が(どのような形で社会に貢献できるか行政の情報などを)地域の当事者に連絡してくれると述べている。また、キーパーソンが、現場の当事者の声を行政に届ける役割を果たしていると述べている。キーパーソンは当事者と行政のネットワーキングの仲介役を担っているといえる。

この語りでは、ネットワーキングの仲介のコンピテンシーの重要性について示唆しているといえる。

<日常のネットワーキングの重要性に関する語り>

日常的にネットワーキングを構築する必要性に関する語りが以下のように見られた。ブラジル人サポーターのAは、以下のように述べている。

助けが必要になってから行くのではなくすぐに行くことが大切。そのためには関係ができていて、ふだんのネットワークが大切

Aは、災害がおきてはじめてネットワークを構築するのではなく、ふだんから日常的にネットワークが構築されていることが大切であると述べている。日常的にネットワーキングができていて、災害時にもそのネットワーキングが活かせるという。

この語りは、日常的なネットワーキングを構築するコンピテンシーの重要性を示唆している。

<ネットワーキングの「厚み」を増すことに関する語り>

次世代を育成しネットワーキングの厚みを増していく必要性に関する語りも見られた。フィリピン人サポーターのDは、以下のように述べている。

キーパーソンは、次のキーパーソンを育成しなければならない。自分よりできる人はまわりには絶対いる。その人を磨いて育てることが大切。その人を信頼できるから自分も任せることができて楽になる。年を重ねるとともにネットワークを重ねる。

フィリピン人サポーターのDは、次世代のサポーターを「育成しなければならない」と述べている。そして後進を育てること自体を含め年齢を重ねるとともに「ネットワークを重ねる」ことの重要性について語っている。単にネットワークを築くだけではなく、時間とともに築いたネットワーキングの厚みを増していくことが重要であるという語りである。

従来「ネットワーク」は、空間的に広げていくという意味で用いられることが多かった。しかし、ここでの次世代を育てネットワークを「重ねていく」という語りからは、「ネットワーク」を時間的に広げて厚みを増していくという観点から捉えている。ネットワーキングを時間的な幅という面から捉えていく観点は従来とは異なった新たな捉え方といえるだろう。

この語りは、「ネットワーキングの「厚み」を増すコンピテンシー」の重要性を示唆している。

## 5. 考察

本稿では、複言語サポーターの語りを分析し、欧州評議会の複言語・複文化能力との関わりを中心に、特に「文脈性」「動態性」に着目しながら、複言語サポーターにとってどのようなコンピテンシーが重要とされるかについて考察を行った。

まず、「状況や文脈に応じて自己の位置づけを変化させたり複数の言語の使用を変化させるコンピテンシー」の重要性を示唆する語りが見られた。具体的には、「相手の文脈の理解についてのコンピテンシー」「文脈に応じて複数の言語を使い分けるコンピテンシー」「文脈に応じて位置づけを変化させるコンピテンシー」の重要性を示唆する語りが見られた。複言語サポーターにとって支援の相手は、ふだん接している相手ではないだけに、相手を取りまく文脈がどのようなものか未知である場合が多い。相手がどのような状況にあるのか、支援の前にあらかじめ相手の文脈を知ることで、支援の際どのように相手とコミュニケーションをとるべきか予測することが可能といえよう。また、相手がどのような状況にあるのか相手の文脈に応じて支援の際用いる言語を使い分けることは、相手にとっても安心しサポートが受けられることに結びつくといえる。そのためには支援の状況や文脈がどのような状況かよく理解した上でどちらの言語を使用することが最もふさわしいかの確に判断するコンピテンシーが求められるといえる。また、複言語サポーターは「サポーター」としての位置づけと「外国人」としての位置づけの2つを備えているが、文脈により自己の位置づけを変化させていくことも必要である。「状況や文脈に応じて自己の位置づけを変化させたり複数の言語の使用を変化させるコンピテンシー」は、相手や支援の文脈を読み取り、文脈に応じて自己の位置づけや使用する言語を変化させていくという動的な側面を備えたコンピテンシーと言える。

次に、「異文化間の調整のコンピテンシー」の重要性を示唆する語りが見られた。双方の文化の違いに気づき、その違いについて説明した上で、支援の現場における文脈の中で最適な方法を選択するのをサポートするという語りが見られた。このように異文化間の調整を行うコンピテンシーは、様々なことが起こりうる支援の現場で、異文化間の誤解を解消し、当事者が自らが育った文脈とは異なった文脈にあることを理解しつつ、その状況において最適な方法を選択することを可能にするといえる。

さらに、「ネットワーキングのコンピテンシー」の重要性を示唆する語りが見られた。具体的には「ネットワーキングにおける自立の必要性に関する語り」「ネットワーキングの仲介の重要性に関する語り」「ネットワーキングの「厚み」を増すことに関する語り」が見られた。ここで着目したいのは、ネットワーキングを野山(2003)の定義に従い、動的なものとして捉えたこと、ネットワーキングを空間的な側面だけではなく、時間的な側面としても捉えたことである。複言語サポーターにとっては、支援の現場においてネットワーキングの一部であることを自覚しつつ、自らが「当事者」と「行政」の仲介になって両者をつなぐといったネットワーキングを行うことについての語りが見られた。また、次世代を育成することで、自ら既に構築したネットワークにさらに厚みを増していくことの重要性に



関する語りも見られた。自らを空間的、時間的なネットワークの一部として位置づけ、その中で人と人の仲介を行う等空間的なネットワークを広げ、人を育てて次世代を育成し時間的なネットワークを広げていくコンピテンシーは支援の「場」にとって重要であるといえるだろう。ネットワークのコンピテンシーは支援の場そのものを変革していくことにも結びつくのではないかといえる。

以上本稿では、複言語サポーターの語りを分析し、複言語・複文化能力という観点を中心に複言語サポーターにとって必要なコンピテンシーの考察を行った。なお、今回は複言語・複文化能力との関連から考察を行ったが、複言語サポーターにとって必要な他のコンピテンシーについては今後さらに考察を進めていきたい。

本研究は、H26-28年度 JSPS 科研費（基盤研究 C）「複言語サポーターの複言語・複文化能力に関する研究-言語使用の実態調査を通して」（課題番号 26370600）（代表徳井厚子）の研究成果の一部である。

#### 引用文献

総務省(2006). 多文化共生の推進に関する研究会報告書.

徳井厚子(2014). 複言語サポーターはどのように複数の言語を使用しているのか. 多言語多文化実践と研究, Vol.6 東京外国語大学多言語・多文化研究教育センター, 24-42.

野山広(2003). 地域ネットワークと異文化間教育. 異文化間教育 18号, 4-13.

山川智子(2010). ヨーロッパ教育における「複言語主義」および「複文化主義」の役割. 細川英雄・西山教行編 複言語・複文化主義とは何か, くろしお出版 50-64.

Council of Europe(欧州評議会) (2001). *Common European framework of reference for languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cambridge University Press. (吉島茂・大橋理枝他(訳編) 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠, 朝日出版社.

(2017年 2月 6日 受付)

(2017年 3月 1日 受理)